

## 血液培養ボトルより *Lactobacillus casei* を検出した症例

◎李 相太<sup>1)</sup>、宇井 孝爾<sup>1)</sup>、平野 絵美<sup>1)</sup>、小泉 章<sup>1)</sup>、大西 雅人<sup>1)</sup>、問本 佳予子<sup>1)</sup>、藪内 博史<sup>1)</sup>、梅木 弥生<sup>1)</sup>  
奈良県立医科大学附属病院<sup>1)</sup>

*Lactobacillus* spp.は、グラム陽性の桿菌で整腸作用や免疫調節作用などの作用を有し、市販の発酵乳製品にも多く使用されている。今回我々は、市販発酵乳製品を常用している患者における *L. casei* の菌血症例を経験したので報告する。

【症例】48歳男性、家族性高コレステロール血症、腹部大動脈瘤人工血管置換術の既往がある。入院約1年半前からたびたび発熱を認め、血液培養からは腸内細菌科細菌や *P. aeruginosa* など様々な菌が複数回陽性となり、そのたびに化膿性椎体炎や関節炎、肺炎などと診断されていた。その後難治性感染症とのことで当院感染症センターに紹介入院となった。当院では前医で最後に検出された *P. aeruginosa* による化膿性椎体炎を想定し、第9病日より

CAZ（1回8g、8時間毎）を開始したところ、第21病日に39.1℃の発熱があり血液培養からは *Lactobacillus* sp.が検出された。この際は2セット中嫌気ボトル1本からであったため汚染菌と判断された。第30病日に再度発熱し、血液培養2セット中3本から再度 *Lactobacillus* sp.を認めた。同定検査では、Vitek MS（Sysmex）で *L. casei* と同定された。

薬剤感受性検査はドライプレート DP34（栄研）で実施し、ペニシリン系およびマクロライド系薬に感性であったため CAZ から TAZ/PIPC（1回4.5g、8時間毎）、ついで PCG（1日2400万単位）が投与され、以後発熱はなく第36・49病日に血液培養を実施したが共に陰性であった。*L. casei* の侵入門戸の検索を行ったところ、経食道エコーでは弁に明らかな疣状を認めなかつたが、腹部造影 CT にて人工血管と十二指腸の瘻着部の破綻や炎症を疑う所見を認め、内視鏡検査では十二指腸水平部に粘膜欠損およびステントグラフの露出を認めたため、同部位が様々な細菌の侵入門戸になっていることが考えられた。問診したところ、患者は健康に良いと考え、特定の市販乳製品を頻繁に飲用していた。【考察】*L. casei* は市販の発酵乳製品に含まれ、常用患者で稀に菌血症や感染性心内膜炎などを起こすことが報告されている。*Lactobacillus* spp.が検出された場合は安易に汚染菌と判断せず、飲食歴の確認や、腸管の破綻、感染性心内膜炎の有無等を検索する必要があると考えられる。連絡先 0744-22-3051(内線 1220)